

愛を感じる授業

2023.8.14

小学5年生の国語の授業だった。教材は、宮沢賢治の「注文の多い料理店」だった。めあては、「おくの戸に書かれた言葉は何だったのだろう。」だった。「どうしてそういうふう考えたのか、理由も書いて」と指示していた。この理由が重要である。同じ考えでも、理由が違う場合もある。

机間指導では、「はあ、おもしろいですね」「ん～」「なるほど」「みなさん、いろいろな書き方があります。気にせずどうぞ」ここまでは、全体に聞こえるように話していた。その後は、「何で～」「純粹に～」など、個人に対してのアドバイスだった。そして、また「理由もちゃんと書いていますね」という全体へのアナウンスがあった。理由が書けていない子は数名だった。

グループ活動に入った。6人×3班だった。ここでも、各グループへの働きかけがあった。その内容は、発表を聞いての「どうだった」、「ここ、こうだとよかったよね」「もう少し話し合ってみて」などだった。

子どもは、ワークシートに書いたものを発表して終わってしまう。ここが問題である。小学5年生である。ワークシートの記述内容をもとにしながらも、その場で、自分の言葉で話せるようにしたい。

全体での交流では、もったいない場面があった。せっかく子どもはいいことを言っているのだが、授業者がそれを取り上げることができない。取り上げる余裕がない。こういったことはよくある。事後の協議会でも、授業者から「どうやったら、読みが深まるのか」という話があった。まずは、子どもたちに、読みたいという気持ちをもたせなければならない。めあてに、学習の必要価値をもたせることも必要である。あとは、教材研究の問題である。授業者が、教材文をどのくらい読んでいるか、どのくらい読めているかである。これがクリアできないと、どう声をかけてよいのかわからないし、効果的な発問も出てこない。

授業では、子どもたちが想像の世界にいつてしまっていた。表現のおもしろさに気づかせたかったということだが、わざわざ想像させる意味があるのか。ただの想像でよかったのか。妥当性のある想像なのか。想像しっぱなしではいけない。

板書を見ると、めあて以外、何も書かれていない。ワークシートを使うと、こういったことも起きる。板書には、様々な機能がある。それを確認しておく必要がある。板書がなくても、話し合いができればよいが、中には、困っていた子もいたはずである。板書が、そういった子を救うことになる。

あったかい、でも厳しさのある授業だった。授業者の教育愛、人間愛を感じた。愛を感じる先生であり、国語の授業だった。